

空



2007年

SORA 19号

晴夜 (19) | 1

柴田 佐知子

山^や笠^ま走る前の鼓動が宙に満つ

博多祇園山笠

追ひ山笠に集ひてすでに怒り肩

街中の男集めて山笠走る

神仏に礼を尽して山笠法被

明王が真赤ぞ山笠の街走る

長老に叱られてゐる山笠法被

雨つれて走れり山笠の母里太兵衛

―「俳句界」九月号より―

誰も来ぬ家は水底土用あい

雷激し神の怒れる書の中も

水中花

高倉 和子

父ははの眠りは浅し青葉木菟

石を積む祈りや田水沸いてをり

連山を軽く叩ける団扇かな

隙間なき雨音夜の水中花

暑気中り紙のごとくに座りたる

畏まる膝の並びて夏座敷



羽拔鶏思はぬ時に鳴きにけり

雨粒に乱れてゐたる蟻の列

頭を振りて鳩の近づく暑さかな

喧騒にもまれし髪を洗ひけり

農具小屋に投網もありて夏の果

八月や尾を引く雲の連なりて

人絶えて道の荒れたる葉鶏頭

父の戦地母の戦後や柘榴の実

虹立つ

中田みなみ

大井川貫く村の新茶摘む

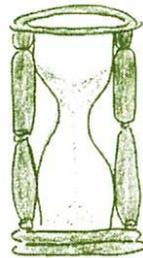
夏料理業平竹に流れ透き

田を植ゑし夜や水音の夢にまで

蒼空から何も落ちない蟻地獄

弘法の水は此処にも草いきれ

ふり向きしとき滴のひかりかな



牛の舌鼻にとどけり雲の峰

休憩の区切りを次の滴りまで

西瓜選るもう目の中の赤くなり

星合ひの空となりゆく浜太鼓

黒船祭イルカの群れに人寄りて

真イルカの跳びて求愛虹立てり

廃校の廊下を進む西日かな

舟蟲の影もて走る原爆忌

耳鳴りはあの八月の蝉しぐれ

蘭船

荒井千佐代

あふち散る午後や赤子に添ひ寝して

真昼間の亀を鳴かせて被爆川

庭螢ミネストローネ冷めるまで

助手席のががんぼ渚にて放つ

さきぶれの夏越し太鼓や駆けゆかむ

青臭き雨後の茅の輪でありにけり



船笛の尾を引く茅の輪くぐりけり
茅の輪抜く海への落暉そびらにし
海峡の闇の迫れる茅の輪かな

出島六句

海へ向く涼み処も大砲も

紙魚はしる蘭館絵巻屠殺の凶

徒広きかびたん部屋に大西日

塩漬けの豚の頭や早星

凌霄花遊女を追ひて死にしとふ

蘭船の先の見え来し夏岬

空作品抄

柴田佐知子

くねくねと日暮のながき螢川

服部 早苗

薄闇の頃から螢が飛び交いはじめる。巧みな表現によって草がかむさる螢の川とうす闇の風情がひろがってくる。「日暮れのながき」がうまい。

形代ののけぞるほどに息かけぬ

中条さゆり

わが身の災や穢を負ってくれる形代。「のけぞる」という語を得たことよって、紙の形代の質感や形が見事に捉えられ、且つ面白い句となった。

死の床の汗は畳を透りけり

吉村 摂護

死と汗というとすぐに思い浮かぶ句にへ今生の汗が消えゆくお母さん 古賀まり子がある。この句を初めて目にしたのは朝の通勤バスの中で、涙が止まらず顔が上げられなくなって困ったことを思い出す。摂護さんの句は父上の死の床の実景であったという。こちらは読む者を立ち疎ませる凄みがある。

風鈴に達するまでは紫煙たり

鳳 蛮華

一筋の煙草の煙。その煙はひろがりつつ薄れ、そして消えてゆく。「風鈴に達するまでは」によって読む者も風鈴の高さまで煙草の煙を目で追うのである。めりはりの

ある表現とシャープなりズムが新鮮である。へむなぐらに映画の余韻梅雨滂沱の力ずくの印象を与える作品も面白い。個性的な作家の初登場である。

白亜紀にもどる気配の大とかげ

岸 千手

白亜紀は一億年ほど前の恐竜がいた時代だ。大とかげから恐竜への連想はさほど特異な訳ではないが、そのとかげに「白亜紀にもどる気配」を察知したとなると、面白さは群を抜いてくる。作者の自在な心の在りようが瑞々しい。

産み月も田植したるや瑞穂の国

星原 悦子

効果を発しているのは座五の「瑞穂の国」。この一語によって稲作が伝来して以来の日本へと思いは誘われる。パール・バックの「大地」を思わせるような過酷な女性の生活もあつたであろう。作者の視座の広やかさが思われる。

蒼空から何も落ちない蟻地獄

中田みなみ

大いなる藁家が百足虫落しけり

ふじの 茜

一句目は蟻地獄の飢えが、二句目は闇が隅々を占めているような藁家が、「落」という字によってそれぞれに描かれている。

父の戦地母の戦後や柘榴の実

高倉 和子

このやうに唇吸はれしやラムネ飲む

堀江 恵子

割れ物のやうに並べて桃を売る

山田 正子

囚われることなくこのように自在に詠みたいものだ。

空集

柴田佐知子選

涅槃図の月は巻かれて隠れけり

福岡

中条さゆり

鈴蘭を活けて句会の始まりぬ

卯波立つ丸くなりてはつまらなし

石仏も紫陽花色に染まりけり

因数分解きれいに板書ながし吹く

畏まる巫女の涼しき富士額

低頭に杳音近し夏祓

形代ののけぞるほどに息かけぬ

おのが影いつも抱きたるあめんぼう

巢燕の奥結納の品積まれ

福岡

吉村摂護

千年の井戸に棲みつく五月闇



縁側に風鈴眼鏡父の肩
亡き父と肩を並べて夕端居
涼しさの固まつて来る足の先
死の床の汗は暈を透りけり
サングラスそつぽ向かれてしまひけり
炎昼の運動場が死んでゐる
長崎忌首にタオルを巻いてゆく
姉妹艦ならぶ岸壁風薫る
野仏の右肩越しに百合の花
機関士の軍手まつさら海開き
ふなべりに影を落して夏の蝶
雷去つてしばし余白にあるごとし
風鈴に達するまでは紫煙たり
籐椅子にぼろんぼろんと古時計

長崎

鳳

蛭

華